

令和3(2021)年度 第2学期始業式 式辞

夏休みに入る前には、コロナ禍の状況について、ある程度厳しい形で推移するであろうとの見通しを持っていたわけですが、現実には予測を超えた厳しさであったというのが、多くの人々がもつ感慨であろうと思います。しかし、あまりにも長期にわたる“緊急事態”は、“予測を超えた”ということに関してさえ驚きもしない感覚の麻痺を、私たちにもたらしているように感じます。ともあれ、始業式を午後で開催するという異例の形で、この2学期が始まりました。

新学期をどのような形で始めるかということについて、職員会議をもって、かなり時間をかけて議論をしました。先生方には、様々な角度から具体的な想定をしてもらい、忌憚のないところを述べてもらいました。議論をまとめるのは実に難しいことでした。どこまで考えても、これで大丈夫だろう、不安な点に対しても十分に対処できるであろう、と思える到達点が、どうしても見えてこなかったのです。職員会議のこのような内情を皆さんに披瀝するのは、もちろん、苦勞したことを分かってほしいからではありません。先日皆さんに配信した、一斉登校・時差時短通学という方針が、それだけ不安定な要素を孕むものであるということを理解してほしいからなのです。

この夏休み期間中、皆さんには、クラブや文化祭準備等の活動において、時間や行動のうえでの厳しめの制約をお願いしました。本来であれば、夏合宿や対外的な活動に、思う存分情熱を傾けていたところであろうに、2年続けてこのような制約を甘んじて受けなければならないのは、君らにとってもきぞ悔やまれることと思います。それでも、活動している諸君の様子からは、現実を冷静に受け止めて、できる限りのことを誠実に行おうという姿勢を見て取ることができました。非常に頼もしく感じました。しかるに、現実には予測を超えていきました。休み中にお知らせしたように、皆さんのなかから、陽性判定を受けた人ならびに濃厚接触者と認定された人が、複数報告されたのです。もちろん、この人たちが不摂生をしていたということではありませんし、必要とされている行動様式を敢えて破って行動していたということも、断じてありません。それぞれに感染防止策を講じながら、気をつけて生活していたにもかかわらず、感染してしまった、あるいは濃厚接触者になってしまったということなのです。ごく普通に、むしろ気をつけて生活していても感染する——、コロナ禍がそういう局面に入ったということを認めざるを得ないようです。つまり、感染はもう、いつでも自分の身に起こりうることである、誰しも、自分は十分に対策を施しているから大丈夫、といった他人事のような姿勢ではいられないということです。くどいようですが、この学校においても、例外なく誰にでも当てはまることなのです。

このような厳しい認識が迫られるなかで、本校では、あえて一斉登校を続けるという決断をしました。それには二つの理由があります。いずれも、昨年度の休校期間から登校が再開されるプロセスを経て、我々が学んできたことなのですが、その一つは、学校が、学びの場としていかに重要な機能を果たしているかということ、私たちは痛いほど思い知ったということです。学びというのは元来ひとりではすべきものではありませんが、そのためには、むしろ、共に学び切磋琢磨する学友の存在が欠くべからざるものであると、我々は確信したと思います。その、共に学ぶ場としての学校の営みを、極力止めたくはない、と考えたのです。もう一つは、君たち自身が示した行動様式の実践です。日々の授業や昼食時等においては、少々危うい場面は垣間見られたものの、総じてしっかりと問題意識をもって慎重な行動を心がけていたと思います。また、文化祭や体育祭の実施においては、あるいは部活動の場においても、君たちが主体性をもって具体的な方策を打ち出してくれました。結果として、今のところ本校では学校での感染が一件も起こっていません。現在の状況は、これまでで最も厳しいものであると思っていますが、本校生徒諸君であれば、それを乗り越えるべく自らの行動様式を自ら編み出していつてくれるだろうと考えたのです。

もしかしたら、この判断は、甘いものかもしれません。早々に学校感染が起こって、しかもそれが大規模なものになる恐れも排除できません。生徒諸君の安全を確保することは、学校として何事にも優先しなければならぬことですから、今後、首都圏や全国の感染状況ならびに医療体制の状況を見て、あるいは皆さんの実際

の行動を見て、これは危ういと判断したら、登校を分散の形式にしたり一時取り止めたりといったさらに厳しい措置をとることも、ためらってはならないと考えています。先ほど「不安定な要素を孕む」と述べたのは、そういった意味があるということを理解してください。

まるで脅すような言い方になってしまい、申し訳ないような気持ちです。このように強く言われれば、つい萎縮してしまいそうですね。しかし、実際に学校生活を送るに当たって肝腎な点は、自分自身のこととして能動的に考えることであるということ強調しておきたいと思います。昼食時、先生の目が離れたときに、ついマスクをせずに会話をしていませんか。授業の合間について盛り上がり、友人たちと密集していませんか。今、自分は大丈夫だと思った人はむしろ危ういのです。もしかしたら自分はいくらしてしまっているかもしれないなど、自分のこととして考えることが、第一歩になります。実際の行動としては、確かに我慢を強いられることになります。しかしこの我慢が、自分の身を守るだけでなく、友人の、あるいは家族の身を守ることにもつながっているということをお考え合わせると、受動的に“やらされる”ことではなく、自分から他者に向けての発信にもなるのだということをお理解してほしいと思います。駒場東邦の、アクティブな学習の場としての機能を、共に守っていきましょう。君ら一人ひとりの積極的な尽力に期待します。

緊急通達のような式辞になってしまいました。一学期の終業式には、ダイバーシティとインクルージョンの話をしたから、オリンピック・パラリンピックに絡めて再度お話ししようかなと目論んでいました。選手の実力が称揚されたり、運営の不手際や構造が批判されたり、様々な議論がありました。皆さんなりに考えてみてください。また、戦後76年ということにも触れたいと思っておりました。やっと結審した裁判の話題もありましたが、次代を担う君たちは“戦後”をどう捉えますか。これもぜひ考えてください。

高校3年生諸君、高い目標を設定して突入した夏休みを終えて、どんな感触を持っていますか。ひと通り思い描いていただけのことをやり終えて、自信を得たのであればそれはもちろん素晴らしい成果です。しかし、多くの諸君は、多かれ少なかれやり残してしまった感覚を持っているのではないかと推察します。実は、そのやり残してしまった不安こそが、次のステップにつながる、いわゆるジャンピングボードそのものなのです。そういう意味で、諸君の駒東生活はこれからまさに“佳境”に入っていきます。今年は昨年が増して状況が厳しいので、もしかしたら孤独に苛まれているかもしれないかもしれませんね。しかし、ひとりぼっちで勉強していると思っても、その基礎となっているところには、これまで駒東で学友と苦労や喜びを分かち合いながら得てきた学びがあるのです。その学びに対して誠実に、そして自信を持って取り組んでほしいと思います。

最後に、全校生徒の皆さんに、ひと言お願いしたいことがあります。このような社会状況において、一人ひとりが不安感を抱えることは、むしろ当然のことであると思います。それでも、その不安は、厄介なものであることは変わりないですから、一人で抱え込んでしまわずに、周りの人に、少しの勇気を持って話してみてください。ご家族や友人でもいいでしょう、あるいは担任や顧問の先生、それ以外の先生でももちろんいいですし、本校にはカウンセラーの先生もいらっしゃいます。いつでもどこでも構いませんし、遠慮は不要です。

このお願いをもって、本日の式辞を閉じたいと思います。

令和3(2021)年 9月1日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦